

「月夜」考

神野富一

一 はじめに

「昼」や「夜」は、人間の世界認識にとって基本的な言葉である。われわれは日常それらを、その語義についてとくに反省することもなく用いている。だが、基本的であるゆえに、それらの語義を正確に把握しようとするとき意外な深みに陥るといふことがある。

たとえば「夜」について広辞苑を引くと、「地球の自転のために、その表面の半分が太陽の反対側にあつて太陽の光線を受けない時間、即ち日没から日出までの時間。夜（よ）」とある。科学的な説明に続き、「夜」を時間の概念として説いている。他の国語辞典・古語辞典でも、ほぼ共通して「日没から日の出までの時間」（日本国語大辞典）のように時間の概念として説明している。しかし、われわ

れの日常の経験は少し違うのではないか。たしかに「夜」を時間の概念で用いることはありふれている。けれども、たとえば久しぶりに戸外に出て、暗い空間を意識し、「ああ、夜だ」と言う時、この「夜」は時間の概念でのみ用いられているだろうか。有名な「国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた。夜の底が白くなつた」という一節の「夜」はどうだろう。これらの「夜」は、暗い空間を含意しているだろう。そしてこうした用法はいくらもある。だとすれば、「夜」を辞典類が画一的に時間の概念としてのみ説明しているのは不十分だと思われる。「昼」についても同様である。「昼」や「夜」という言葉は、そうして時間の概念のみならず、空間の概念でも用いられることがある。

古代においても、「昼」や「夜」という言葉が空間の概

念でも用いられたことに留意する必要がある。たとえば古事記に、月読の命は、「夜の食す国」の支配を伊耶那伎の命から委任されたときれている。「夜の食す国」とは、夜が領有する国の意で、ここでの「夜」は、夜の神靈ともいふべき、一つの靈格としての扱いであろう。そしてその神靈に領有されるのが「国」、つまり一つの空間世界として述べられている。永藤靖氏の指摘するように、だからこそ「夜の食す国」は、天照大御神の治める「高天の原」、建速須佐之男の命の治めるべき「海原」と並列されているのだ。またそのことに關して、氏が、

昼や夜が時間的な表象を現わす以前に、もつと強い別個な觀念として古代人の脳裏には刻みこまれていた。

(中略) 明るい太陽の輝く世界と闇に塗りこめられた暗黒世界とは古代人にとって、別個な、隔絶された、相反する世界像として映っていた。

と考察しているのは正当だろう。特別な神靈に支配される闇の世界としての「夜」。たしかにこのような例は、「夜」が空間の概念でも用いられた一例というよりは、むしろ空間の概念の方が時間の概念に先立つ、始原の認識であつたことを思わせる。

さて、「夜」の複合語の一つとして「月夜」がある。古代の「月夜」についても、空間の概念としての考察が必要

であろう。すでに先の例で、神話的概念として「夜の食す国」が月の神の支配する世界であるといわれていることは、万葉集以降にみる「月夜」という語の先立つ意味が、神聖性を帯びた月の照らす夜の空間にあつたことを予測させる。事実、万葉初期の、

わたつみの豊旗雲に入日さし今夜の月夜清けくありこそ(一五)

という例にその意味はなお生きていると考える。「今夜の月夜」という表現で、「今夜」は時を示し、清らかであつてほしいと望まれる「月夜」とは、呪的な、いわば「月世界」(全注)ともいふべきものであろう。

万葉全期を通してはどうだろうか。以下、万葉集に表れる「月夜」の語義の検討、および後世の和歌におけるその変遷の考察を試みる。

二 「月」と「月夜」

「月夜」の語義について、『時代別国語大辞典 上代編』には「①月のある夜。つきよ。②月。月の光」とある。そして万葉集の注釈書の類では、『注釈』に、

「月夜」は万葉では月そのものをさし(一・一五)、

月の夜に用ゐたもの殆ど無く、しひて解釈すれば全部月の事と解釈する事も出来る有様であるが、右に引用

した「照れる月夜に直に逢へりとも」や次の家持の答へた作の「月夜には門に出で立ち」と照合して、今のこの作の如き（「春日山霞たなびき心ぐく照れる月夜にひとりかも寝む」引用者注）は今日用ゐる月夜の意と見た方が穩かであらうと思ふ。次の作で述べるやうに、同じ万葉も時代が下るに従つて語意に変化を来したと見るべきであらう（七三五の注）

というように、万葉集中の「月夜」は多くは「月そのもの」の意であり、少数の例について「月のある夜」とする見解が、近年まで支配的であつた。「月夜は月の出て居る夜間といふよりも、月其のものに直接な語である」（私注、七三五の注）、「ツクヨは現代の月と同じ。或いは歌語か」（大系、二一一の注）とするのも、そうした見方に準ずる。しかし、万葉歌中の「月」と「月夜」の例をみていくと、表現性において両者に明らかな違いが認められる。このことについては、すでに中嶋節氏が集中の全用例についていくつかの観点から調査し、的確な指摘をしているのだが、多少観点や数値を異にするので、次に私の調査結果を簡略に示そう（以下、万葉歌の訓読は基本的には集成本に従う）。

「月」と「月夜」は歌中でその動作、ないしは状態が詠まれていることが多い。そこで両者のどのような動作、ま

た状態が詠まれているかを調べ、比較する。

まず動作についてだが、「月」（歌中で全一四一例。うち、単独に「月」というもの一〇五例、複合語その他三六例）では、次のような動作が次のような頻度で詠まれている（数字は例数。複合語は原則として分解して示す）。

出づ	19	来	9	立つ	(立す)	4	いさよふ
渡る	18	行く	4	傾く	6	片寄る	1
ゆつる	2	うつろふ	2	過ぐ	1	隠る	12
こもる	1	入る	1	失す	1	満ち欠けす	3
照る	26	照らす	3	(参考、あり)	2	ます	
1	たる	1					

当然ながら、「月」は一つの天体として、天空にある間のさまざまな動作が詠まれていることがわかる。中で「照る」「照らす」も仮に挙げたが、それらは月の動作というよりもむしろ状態や作用というべきだろう（後に取り上げる）。それらを除いても「月」の動作は多様であり、とくに「出づ」「渡る」（うち「夜渡る」が11例）「隠る」「来」（うち「出で来」が7例）「傾く」などに例が多い。

対して、「月夜」（歌中で全五五例。うち、単独に「月夜」というもの四二例、複合語一三例）については次のとおりである。

渡る	1	ゆつる	1	さす	1	寄る	1	か
----	---	-----	---	----	---	----	---	---

すむ 1 明く 1 照る 13 照らす 1

全用例数の多少を勘案しても、「月夜」の動作が詠まれることは少ない。中で「かすむ」は状态的、「明く」は夜が明ける意で、いずれもそれ自体の動作をいうのではない。それらと「照る」「照らす」を除くと、「月夜」についての動作がいわれることはわずかに四語四例にすぎない（それらも実はそれ自体の動作とみられないことは後にみる）。「月夜」が「出で」たり、「立」ったり、「隠れ」たり、「傾」いたりする例はなく、「渡る」ということもまれである。

次に、「月」や「月夜」の状態はどのように表現されているか。

「月」については、

さや 1 さやか 1 さやけし 2 さやけさ
1 よし 1 おもしろし 1 たたはし 1
あかし 2 おほほし 1 近し 1 高々 1
長し 1

が数えられる。「月夜」については、

清し 13 さやか 1 さやけし 2 よし 5
かそけし 1 おぼつかなし 1

「月」計一四例に対して「月夜」計二三例。全用例数の多少を勘案すると、「月夜」は「月」の四倍ほどもその状

態（ほとんどが讚美）が詠まれていることがわかる。

以上、「月」は主にその動作が詠まれ、「月夜」は動作が詠まれることはまれで、主にその状態が詠まれているといえる。このことは、先の中嶋氏もほぼ同様に指摘するところである。そして中嶋氏はさらに、「月」が何か（多くは恋人）の比喩として用いられている例が二一例もあるのに対して「月夜」にはそうした例が全くないことを指摘し、それは「月」が物体の概念でとらえられ、「月夜」にそうした概念がなかったことを意味していると正当に論じている。

加えるに、次のような諸点でも「月」「月夜」をめぐる表現に大きな相違が認められる。「月」については目的格に立つ表現が「待つ」「見る」「隠す」「恋ふ」「離る」「刺す」「とどむ」「偲ふ」などの動詞について多くあるが、「月夜」についてはそれが「見る」「忘る」についてくらいしかない。たとえば「月を待つ」という表現は一八例もあるが、「月夜を待つ」は一例もない、などのことである。また、「月の光」「月の影」「月の面」「月の内」など、「月」が所有格に立つ表現は多くあるが、「月夜」については一例もない。さらに、「月」の所在する場所として「山の端」「山」「天」「空」などがしきりに詠まれているが、「月夜」の所在する場所（照る場所ではない）はとくに言われない。

たとえば「山の端」にいる「月」は八例もあるが、「山の端」にいる「月夜」の例はないのである。

「月」と「月夜」をめぐる表現の以上のようないちじらしい相違は、両語の意味の違いを考えさせるに十分であろう。「月」については、その動作がさまざまに詠まれ、目的格や所有格に立つ表現も多彩で、またその所在する場所も詠まれ、さらに比喩としても多く用いられているのは、いうまでもなくそれが夜空に浮かぶ天体として、一つの実体的なモノとして把握されているからである。他方、「月夜」については、動作が詠まれることはまれで、主にその状態が詠まれ、目的格に立つ表現は乏しく、また所有格に立つ例や何かの比喩に用いられる例がなく、所在する場所も言われないのは、それが「月」のように実体的なモノとしては扱われていないことを意味しよう。そして実体的なモノではない「月夜」とは、月明かりの夜という一つの空間、ないしはその状態を意味すると考えざるをえない。それは月自体を意味しない。

紛らわしいものも含めて、いくつかの例についてみよう。

月夜よし川音清しいぎこここに行くも行かぬも遊びて行

かむ (五七一)

月のある夜の空間の状態を「よし」とほめている。

久にあらむ君を思ふにひさかたの清き月夜も闇の夜に

見ゆ (三二〇八)

「見ゆ」と視覚でとらえられている「清き月夜」も「闇の夜」も、夜の空間、ないしはその状態をいう。また、「清き月夜」という場合、「清き」は空間の状態を形容する語としてあるので、月のある夜の時を形容するのではない。

誰が苑の梅の花ぞもひさかたの清き月夜にここだ散りくる (二三二五)

作者は、やはり清らかな月明かりの夜という一つの空間を見ている。そこへどこからかさかんに梅の花が散ってくる。

わが背子が振り放け見つつ嘆くらむ清き月夜に雲なた

なびき (二六六九)

「わが背子」が振り仰いでいるだろうというので、視線は上空にある。類歌、

遠き妹が振り放け見つつ偲ふらむこの月の面に雲なた
なびき (二四六〇)

を参照するとこの「月夜」は月自体と考えやすいが、しかしなお、「月の照らしている環境をいう」(集成)という解釈でよいだろう。月の面と月の照らす空間と、両方に「雲なたなびき」という表現があつてよい。用例数は少ないが、「月」の美の形容は「さや」の系統の語でいわれ、「清し」

とはいわれていない事実も参考になる。

闇夜ならばうべも来まさじ梅の花咲ける月夜に出でまさじとや（一四五二）

ここでも「月夜」は「闇夜」に対比されている。ただ、この場合などは「月夜に」と二格をとり、「闇夜」とともに時間の概念をも含んでいよう。それにしても、この歌に表れている視覚性は無視できない。見ると外界は清らかな月夜である。真つ暗な闇夜ではない。まして梅の花も月光に照らされ、美しく咲いている。それなのに男は来ない、なぜ……というところでこの歌は発想されていよう。同じく「闇夜」と「月夜」を対比する相聞で、先の三二〇八や、この言を聞かむとならしまそ鏡照れる月夜も闇のみに見つ（二八一）

三 「照る」と「月夜」

「月が照る」ないし「照る月」という場合が計二六例、「月夜が照る」ないし「照る月夜」という場合が計一三例ある。とくに「月夜」について「照る」という表現が相当数あることが、古来、万葉集の「月夜」を「月」と同義とする見解の一つの根拠をなしてきたようだ。しかし、「月」

について「照る」という表現と「月夜」について「照る」という表現は、同じ事態を表しているのだろうか。

「月が照る」は、月が輝く（輝いている）ことを意味し、「照る月」は輝く（輝いている）月をいう。しかし、「照る月夜」の場合はどうか。「照る月夜」の例のうち、

大伴の見つとは言はじあかねさし照れる月夜に直に逢へりとも（五六五）

春日山霞たなびき心ぐく照れる月夜に一人かも寝む（七三五）

長谷の斎楓が下にわが隠せる妻あかねさし照れる月夜に人見てむかも（二三五三）

雪の上に照れる月夜に梅の花折りて贈らむ愛しき子もかも（四一三四）

の諸例は、二格をとり、共通して「照っている月夜に」と「照る」という型をもつ。この「月夜」は「照っている」と修飾されて空間的概念を保ちつつ、そうした状態の継続する夜の時の意味であろう。これらの「月夜」を月自体の意味と解することは、文脈からもできない。また、これらの「照れる月夜」を、時に注釈書に見られるように「月の照っている夜」と解するのも、「照れる」は「清き月夜」の「清き」などと同様、「月夜」を修飾しているので、語法上無理がある。「照れる月夜」の「照れる」は、「照る月」

の場合とは異なり、月明かりの夜の空間、ないしはその状態の形容である。

この言を聞かむとならしまそ鏡照れる月夜も闇のみに見つ(二八一一)

先にも「月夜」と「闇夜」を対比した歌を引いたが、万葉集の「月」や「月夜」の歌を読んでいくと、当時、男女は月夜に逢い、闇夜には逢わない習俗があったことがわかる。これもそうした習俗をふまえて詠んでいるので、「闇」という空間に対比されているのは月自体ではなく「月夜」という空間なのである。

明日の宵照らむ月夜は片寄りに今夜に寄りて夜長くあらなむ(一〇七二)

も、月自体が「片寄りに今夜に寄る」とする解釈は奇妙である。明晩の明るい月夜の時が今夜の月夜の時に接続してほしいというのである。

家にしてわれは恋ひむな印南野の浅茅が上に照りし月夜を(一一七九)

現代の諸注釈の多くが「月」と解している例だが、しかし「浅茅が上に」照るとある。「雪の上に照れる月夜」(四一三四)という類句もあるように、この「照る月夜」も、月が空にあり、月光が原野の浅茅の上に一面に清らかに降りそそいでいる(代匠記に「月ノ光ノキラキラト照タラ

ム」という)澄明な夜の空間、ないしはその状態をいっとすべきである。

ぬばたまの夜霧の立ちておほほしく照れる月夜の見れば悲しき(九八二)

水底の玉さへさやに見つべくも照る月夜かも夜の更けゆけば(一〇八二)

雨晴れて清く照りたるこの月夜また更にして雲なたなびき(一五六九)

妹が家の門田を見むとうち出来し心もしるく照る月夜かも(一五九六)

これらについては、これらの歌自体からだけでは「月夜」の語義を確定することは難しい。しかし「照る月夜」の以上の検討から、これらのみを別して月自体と解すべき理由もとくにない。

以上、「照る月夜」の例をすべて挙げたが、それらは輝く(輝いている)月ではなく、月が空にあり、そのために美しく発光しているような夜の空間、ないしはその状態、また、それが継続する時を意味していた。「照る月」とは意味を異にし、別の事態を表しているのだ。

心なき秋の月夜のもの思ふと寐の寝らえぬに照りつつもとな(二二二六)

春霞たなびく今日の夕月夜清く照るらむ高松の野に

(一八七四)

と、「月夜」が「照る」の主格に立つ場合も、事情は変わるまい。

四 その他の動詞をともなう「月夜」

「月夜」が「照る」以外の動詞をともなう例が少数あった。「ゆつる」「さす」「寄る」「照らす」「渡る」(各一例)の場合である。「寄る」(一〇七二)についてはすでにふれた。その他の場合はどう解されるか。

まそ鏡清き月夜のゆつりなば思ひは止まず恋こそ増さ
め(二六七〇)

「月夜」が「ゆつる」を、多くの注釈書に「月が沈む」と解する。しかし、ここでも相聞の文脈で、「月夜」が「闇夜」に「ゆつる」といわれているのだ。作者は現在、「清き月夜」という空間に面しつつ、それがやがて闇夜へと移った場合の自らの心理の変化を想像している。集成に「月が照らすこの夜空が暗くなってしまう」と口訳するのに近い。類想歌の、

ぬばたまの夜渡る月のゆつりなばさらにや妹にわが恋
ひ居らむ(二六七三)

の「月がゆつる」とは、意味の違いをみたい。

わが宿の毛桃の下に月夜さし下心よしうたてこのころ

(一八八九)

「譬喩歌」で、上の句にはわが娘に初潮がおとずれたという寓意があると解に従う。「月夜さし」の「さす」は、「天然自然の現象としておのずから発現する」(時代別)意。桃の木の下に月夜の状態が発現しているのである。そこに初潮の発現という寓意をこめたところに、この珍しい表現が成立していよう。

去年見てし秋の月夜は照らせども相見し妹はいや年離
る(二一一)

人麻呂歌で、第二、三句の原文は「秋乃月夜者雖照」。

「雖照」には旧訓テラセドモと助動詞「り」を補読するテラセドの両訓が行われているが、「照」をテラスと他動詞に訓む点は共通している。そしてそのことが正しければ、「月夜」が「照らす」というのだから、この表現は「月夜」が月自体をも意味した確例とならう。事実、そうした意図でこの歌を挙例する古語辞典がいくつもある。しかし、先述のように「月夜」については「照る」という表現が多く(一三例)、中に「月夜が照る」という例もあつた(一八七四・二二二六)が、「照らす」という例は他にはない。また「月」についての表現をみても、「照らす」は「照らす日月」という場合が二例あるほかには、「月読の光は清く雖照有」(六七二)の第三句をテラセド、「春日山押而

照有この月は」(二〇七四)の第二句をオシテテラセルと訓んでいる例があるばかりで、「照る」というのが一般であつた(二六例)。すると、この場合も「照」を自動詞に訓む、テレドモという訓の方が自然ではないか。「月が照る」場合だが、

天さかる鄙にも月は弓礼、杼母妹ぞ遠くは別れ来にける(三六九八)

という類想歌もある。この遣新羅使人歌は、遠く離れた「妹」を不変な「月」と対比して別離を嘆いており、人麻呂歌をふまえ、死別を生別の場合に転用した表現とみられる。人麻呂歌をテレドモと訓む傍証とならう。

この後世にも有名となつた歌は、古来「雖照」の「照」を他動詞で訓んできたのだが、その原因には、万葉歌の「月夜」の読みの歴史を綯い合わせて、平安朝以降の人々の「月夜」という語の理解と使用の歴史が介在するようだが、それは後節においてみる。

去年見てし秋の月夜は渡れども相見し妹はいや年離る

(二二四)

原文、「秋月夜者雖度」。前歌と第三句が異なるのみ。通説は「月夜」を月自体と解し、上の句を、「去年見た秋の月は今も変らず渡っているが」(集成)などと口訳する。

「月が渡る」という表現は多く(一八例)、この解釈はす

こぶる安定しているかにみえる。しかし、この歌の「月」と「妹」との対比が、「月は眼前に照っているが妻はわが眼には見えない、という気持ちを表わす」(同)ところにあるなら、「月が空を渡る」と、月の移動を表現する意味はどこにあるのか。先の「照れども」と「いや年離る」には不変と無常とのあざやかな対比があつた。「照れる月夜」は男女の逢うべき夜なので、つまり作者にとつて月夜がいや照るほど、妹の喪失感深まるわけであつた。そうした対比が「渡れども」と「いや年離る」には読み取りにくい。この「渡れども」の措辞についての、「照らせども」は自然でよいが、『渡れども』の方は何だか不自然でまづい(斎藤茂吉『柿本人麻呂 評釈篇』)、『照らせども』に対して抽象的で、前者の切実さが無い(注釈)などの悪評も、そこに関連しよう。けれども、そうしたもので足りなさは、実は「雖度」の誤読に起因していたのではなかつたか。「月夜」が月明かりの夜の空間、ないしはその状態の意味であるなら、「月夜がわたる」の「わたる」は「広く及ぶ。くまなく行きわたる」(時代別)の意味である。この意味の「わたる」は、「立ちわたる」「満ちわたる」「咲きわたる」などの補助動詞以外は万葉歌にはみえないようだけれども、月明かりの夜の状態でくまなく行きわたっているという表現は、「照れども」と同様、不変

と無常の対比をきわだたせよう。

以上、「月夜」に「照る」以外の動詞がともなう例を検討したが、それらの数少ない動詞も、「月夜」を実体的なモノとしてその動作をいうものではなく、むしろ状態や状態の変化を表していた。ここでも「月夜」を月自体と解すべき必然は探れなかったということになる。

五 万葉歌の「月夜」の意味

上代の人々は、「月」とは別に「月夜」を認識していたのだ。それは「月神の支配する夜の世界」という神話的な観念を根拠としてもちつつ、月明かりの夜の空間、ないしはその状態を意味した。そして彼らは月自体の動作や状態の表現とともに、この空間としての「月夜」の状態をもさかんに表現した。「月夜」に、「月」のようにそれ自体の動作をいう表現が全くないのは、その語義からして当然のことであった。「月夜」はまた、そうした空間の概念を保ちつつ、その空間の継続する時として、月明かりの夜の時という時間の概念でも用いられた。

先の中嶋氏は、万葉集の「月」と「月夜」をめぐる表現の比較を通して、「月夜」は「物体としての月」とは別に「状態としての月を指す語」であり、「月が清らかに照っている状態」をいったと結論づけている。上述の分析とは、

重なる部分もあるが、「月夜」の空間性にふれない点など違いもある。けれども中嶋氏が、万葉集の「月夜」の理解に関し、「そもそも、『月夜』とは、『月』と訳したり、『月の出ている夜』と訳したりするべきものではないのではないだろうか」と古来の通説を批判し、万葉集の「月夜」の例は統一的に理解すべきであり、またそこには月についての古代的な認識がみられるのだと主張している点には強く賛意を表したい。

なお、近年の注釈類には「月」との語義の差異を意識して「月夜」を注する傾向がみえる。「月」の意にも用いられるが、『さやけし』と言った場合には月に照らされた情景の意」（集成、一五の注）、「月そのものと月明の夜とを区別しないことば」（全訳注、四一三四の注）、「月を中心としその光の照らす世界をいう語。月そのものをさすように見える場合も、『月』に対して空間の広がり意識されている」（釈注、一〇七〇の注）などである。

いま一点、補う。万葉集自体の歌の分類において、巻三で「大伴坂上郎女の月の歌三首」の中に「月夜」の歌が含まれている（九八二）。同様に、巻七で「月夜」の語を含む一〇七〇・一〇七二・一〇七三・一〇八二は「月を詠む」という題詞でくくられる歌群の中にある。巻十でも、二二二六〜九が同様であり、さらに二二二〇〇が「月に寄

す」歌群の中にあつて直後の「夜に寄す」歌群の中には入れられていない。しかし、このようなことは「月夜」が月自体の意味であることを示すのではなく、編者が「月夜」を「月」に強く関する語として扱った結果というにすぎないだろう。「月」のつくりだす事態が「月夜」であるとも、「月夜」には「月」が含まれているともいえる。

六 平安朝以降の和歌における「月夜」

平安朝以降の和歌の世界では、「月夜」の詠み方に明らかな変化がみられる。

まずいちじるしいのは、用例数の減少である。たとえば八代集の合計で見ると、とくにただ「月夜」というものはわずかに計一一例にすぎない。複合語は「夕月夜」九例、「卯の花月夜」一例、「おぼろ月夜」三例（新古今和歌集のみ）。この傾向は、新編国歌大観によれば、当時の八代集以外の歌集においても変わらない。そして新古今和歌集以降では、夕月をいう「夕月夜」、おぼろ月をいう「おぼろ月夜」など複合語の例は増えるが、ただ「月夜」というものはやはり少ない。

それとともに気づかれるのは、「月夜」の意味が、万葉歌を引くものやその影響を受けたものを除けば、辞典類の説明のように、月のある夜という、主に時間の概念で用

いられるか、月・月光の意味かにほぼ分かれていることだ。そこには「月夜」の空間的概念がほぼ失われている（以下の平安朝以降の和歌の引用はすべて新編国歌大観による。ただし一部表記を改める）。

月夜にはそれとも見えず梅の花香をたづねてぞ知るべかりける（古今和歌集、四〇）

月夜には来ぬ人待たるかきくもり雨も降らなむわびつつも寝む（同、七七五）

月夜の明るい空間が意識されてはいるが、いずれも二格をとり、月明かりの夜の時の意味で用いられている。万葉にもすでにあらわれていた「月夜に……する」という表現の継承がここにみられ、こうした詠み方は細々ながら後にも受け継がれていく。

月夜よし夜よしと人に告げやらば来てふに似たり待たずしもあらず（同、六九二）

万葉歌、

わが宿の梅咲きたりと告げやらば来といふに似たり散りぬともよし（一〇一一）

をふまえる。「月夜よし」という表現も万葉集にみえ（「月夜よし川音清し」、五七二）、それを受けつつ、ここで「月夜よし夜よし」と「月夜」と「月」を並列させる古今的表現が成り立っているのは、「月夜」がすでに月自体の意味

になりきっているからであろう。「月夜ヨシトハ、月ノアカクテキヨキナリ」(古今集注)。

幾夜経て後か忘れん散りぬべき野辺の秋萩みがく月夜を(後撰和歌集、三一七)

は月光の意、

ほのみえて入りぬる月夜天の門の明けはつるまで詠め

つるかな(和泉式部統集、三六八)

山の端をめぐる時雨の雲間よりとりあへず出づる夕月

夜かな(正治第二度百首、六九)

卯の花をおのが月夜と思ひけり声もくもらぬ郭公かな

(拾玉集、一七三八)

などは月、または夕月の意。前二首にみられるような「月夜」が「出で」たり「入」ったりする表現などは、万葉集ではついぞみられなかった。

また、歌字書を見ると、俊頼髓脳に、

月よゝみころもしでうつ声聞けばいそがぬ人もねられざりけり

という歌について、「月よゝみとは月きよみといへる、同じ事なり」とある。「月夜」の意味は月自体と解されているわけだ。さらに同書で、万葉歌の、

わたつみのとよはた雲に入り日さしこよひの月夜すみあかくこそ

について「こよひの月夜」を「今宵の月」と注している。

また「夕月夜」について、古今集注に「ユフサリノ西ノ山ノハニミエテイリヌル月也」とし、綺語抄(巻上)や八雲御抄(巻三)にも夕月のことと説いている(いずれも日本歌学大系本による)。当時の歌人たちが、「月夜」をはっきり月自体の意味と意識して歌に詠んだことがわかる。

ちなみに、平安朝以降のこうした趨勢の中で、あの人麻呂歌、

去年見てし秋月夜雖照相見し妹はいや年離る(二二一)

も、「月夜」は月の意味として、「秋の月夜はテラセドモ」と訓まれるようになった(古今和歌六帖、二四四四・拾遺和歌集、一二八七)と考えられる。

平安朝以降の和歌において「月夜」が空間的な概念を失っていった証拠は、「月夜」が「清し」「さやけし」「照れる」などの、空間やその状態の形容にはふさわしかった言葉で表現されなくなったところにも見いだせる。わずかに、先のように「月夜よし」「月夜よみ」と詠む表現がみられるが、それらは万葉の伝統というべきだ。

よさの浦や潮風松をはらふなり清き月夜のはるかなる影(千五百番歌合、八七三)

天の原振り放けみればます鏡清き月夜に雁鳴き渡る

(金槐和歌集、二二九)

など、中世以降の歌には少数みえる「清き月夜」という表現も、万葉歌に学んだものであろう。

こうして、平安朝以降の和歌の世界においては、「月夜」という言葉はあまり使われなくなり、使われてもほぼ月のある夜の時という意味か、月・月光の意味かであった。それは、上代の人々が「月」とは別に認識した空間、ないしはその状態としての「月夜」の意味が失われ、夜か月かという意味分化していったすがたとみられよう。失われたのは一語の意味であるとともに、「月夜」を昼間とも闇夜とも異なる一つの独特な空間とする知覚、またおそらく太古から続いていただろう一つの世界像である。

ただし、平安朝以降の歌人たちが、月明かりの夜の空間、またその美を意識しなかったわけではない。それどころか、平安朝以降においてこそ月の照らした情景や月光の美が言葉を尽くして詠まれたことをわれわれは知っている。しかしそれはもはや「月夜」という言葉によってではなく、秋の夜の月に重なる雲晴れて光さやかに見るよしもが

な(後撰和歌集、三二〇)

くまもなきみ空に秋の月すめば庭には冬の氷をぞ敷く

(千載和歌集、二七九)

月影のすみわたるかな天の原雲吹きはらふ夜半の嵐に

(新古今和歌集、四一一)

など、「月の光」「月影」などの言葉や、空や地上の具象的な描写によって表されたようだ。そして、これらの例歌からも読みとれるように、当時の歌人たちの美意識の中心は、あくまで「月」自体に占められていた。歌学書の類にも「月」の歌や表現はしきりに取り上げられ、当時の歌人たちが「月」の詠み方にいかに腐心したかが知られる。ただ、そこでは「月」は一つの魅力つきせぬ風物と化していたのであり、もはや決して夜の空間に異世界を現出する神話的な存在ではありえなかったわけだ。

それにしても、複合語を含めて、平安朝以降の和歌の世界で「月夜」が月自体の意味で意識的に用いられたのはやはり不思議なことである。そうした用法は散文の世界にもやや広がっている。

夜いたうふけたる月夜の、はるかにすみたるに(宇津保物語・樓上)

しはすの月夜のくもりなくさしいでたるを(源氏物語・総角)

はなやかにさしいでたるゆふつくよに(源氏物語・賢木)

あかつき月夜のさやかなるに(狭衣物語・卷二)
「月夜」を月自体の意味で用いるというこうした現象は、

平安朝以降において、「月夜」は「月」の歌語、ないしは雅語であるという意識が成立したためであるとみるほかはない。そのことは、雅語性の強い「夕月夜」や「おぼろ月夜」が多用されるようになったところにもうかがわれよう。ただし、ただの「月夜」は、雅語とはいっても「月」とは違ってあまり詠まれもせず、歌字書の類にも取り上げられることのない不人気な言葉となったようだ。

「月夜」が「月」の雅語となった一因には、万葉歌などの上代の歌の受容における一種の誤読もあったのかもしれない。ひるがえって、万葉歌の読みの歴史という側から眺めると、平安朝以降の和歌の世界で、「月夜」を、「夕月夜」「おぼろ月夜」「あかつき月夜」「有明の月夜」などを含め、月自体の意味として詠む長い伝統が形成されたことにより、万葉歌の「月夜」をも多く月自体と読みとる伝統を作った、ということがいえる。そしてそれが、今日に至るまで強固に保たれてきたのだと思われる。

「月夜」という言葉の有する空間的概念は、この論文の初めに「夜」という言葉の概念についてふれたように、古典的歌人たちよりもかえって現代人の方が感じているかもしれない。月の夜の空間を眺めて、「いい月夜だ」と言うことはある。時代は過ぎ、「月夜」を月自体の意味として、もうわれわれは考えていない。けれども、われわれの意識

している「月夜」は、むしろ神話的観念を根拠にもつ独特な世界像などではありえない。現実の生活において「夜」をも失いつつある時代でのそれであるというべきか。

注

(1) 永藤靖『古代日本文学と時間意識』第二章「記紀に現れた夜と昼の世界」(一九七九年)

(2) 中嶋節『万葉集』における「月」と「月夜」について『愛媛国文研究』三八、一九八八年(二月)